

鹿児島市における幼児期から児童期移行の音楽プログラムの取り組み I

Music Program for Child Development from Preschool to Elementary School
in Kagoshima City

寺園玲子・新村元植・中村礼香

Reiko Terazono, Genshoku Shinmura, Ayaka Nakamura

要旨

幼稚園や保育所から小学校への移行期における適応については、他自治体でも様々な問題が指摘されている。本稿では、この問題に対処する手段の一つとして音楽的手法の有用性を考察した。まず、幼稚園において音楽表現による音楽プログラムを実施することにより、幼児がより音楽に親しめる環境を考えた。その結果、幼児が音楽に対して興味を示し、豊かな表現力があることを示した。今後は、この音楽プログラムの汎用的指導法を開発し、幼児期から児童期移行の問題解消に資することが課題である。

はじめに

近年、幼児期から児童期の小学校へ移行する際に、その活動内容が「援助」から「指導」へと移行し、情緒指導的環境から教科指導的環境が強くなり、いわゆる「小1ギャップ」(注1)や「小1プロブレム」(注2)と呼ばれる問題行動が生じる。そこで、鹿児島市の小学校及び幼稚園や保育所ではこのリスクに対してどのように対処しているかを調査し、さらに音楽教育においてこれらに対しての効果的な対処法を提案し、その結果を考察する。

小学校から中学校移行期の「中1ギャップ」については、鹿児島県においてもその問題性が研究されている。(注3)、また小学校中学年から高学年移行期に主として学習内容に起因する小5ギャップについても問題視されてきた。しかし、その最も根本的問題であると考えられる、小1ギャップ、すなわち幼児期から小学校移行期の問題解消については、さらに多角的な検証が必要であると考えられる。そこで、音楽的視点からその問題解消に有効なプログラムを開発し、その有効性を検証する。

方法

- ①対象の小学校に対して、児童の移行時期や接続の問題についての調査を実施する。
- ②小学校に対する調査に基づいた問題分析後、幼稚園でのリスク軽減に対処する音楽プログラムを考案し実施する。
- ③指導結果の有効性を検証し、今後の本学音楽科授業科目の指導内容へ活用する。

1 鹿児島市の幼小連携研修会の取り組み

幼稚園教育要領第3章には2特に留意する事項として、「(5) 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師と意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」とある。

これについて鹿児島市では、鹿児島市立幼稚園協会の申し入れにより、平成15年度から鹿児島市教育委員会と鹿児島市立幼稚園協会は幼小連携研修会を実施している。これは、小学校の授業に集中できない小1プロブレムへの対策として、学びや育ちの連続性から、幼稚園から小学校、また一人一人の橋渡しをスムーズにする目的で設置された。

それに先立ち平成14年度に実施された、幼稚園と小学校による連絡会の実態調査では、その実施率が公立学校で24%であり、研修会の必要性が確認された。その後、鹿児島市をブロックに分け、年間2回の幼稚園及び小学校の代表者会とブロック別研修会が実施されてきた。ブロック区分は市町村合併で平成16年は17ブロックであったが、平成22年度より22ブロックである。

その後、平成23年度では「幼児教育と小学校教育の円滑な接続を目指した教育課程の改善・充実を図り、適切な年間指導計画等の作成に努める。」ことを内容にし、「学校生活への適応」と「学びの連続性」を踏まえた、入学準備カリキュラムやスタートプログラムの作成が計画された。そして平成24年度では、幼児と児童の積極的な交流をより推進したカリキュラムの改善を図っている。(注4)

2 鹿児島市の幼小連携の現状

平成24年度鹿児島市における幼小連携の現状について、鹿児島市教育委員会資料(注5)をまとめると、公立幼稚園における交流は以下の通りである。

①幼児と児童の交流 (97.3%)

- ・生活科等での交流
- ・行事の合同実施(遠足、運動会、学習発表会)
- ・ふれあい給食
- ・田植え、稲刈り、芋植え、芋掘り
- ・音読発表会、読書まつり、など

②教員同士の交流 (94.7%)

- ・幼保小連絡会
- ・保育参観、授業参観
- ・行事の事前事後打合せ
- ・バレーボール大会
- ・相互授業参観、合同研修
- ・初任研、パワーアップ講習の受け入れなど

③幼小接続の現状と課題

- ・幼児と児童の交流活動や幼小の教職員の意見交換等の取り組みはある程度実施されているが、その取り組みは十分とはいえない。

その理由；○接続関係を具体的に維持することが難しい。

○幼小の教育について十分理解、認識していない。

○接続を意識した教育課程の編成に積極的ではない。

幼児と児童、及び教員同士の交流は、多くの鹿児島市の公私立幼稚園や小学校で実施されている。その内容は学習活動より特別活動の要素が強い。幼児と児童の交流については、行事体験やコミュニケーションが小1ギャップの解消に適切である。一方、教員同士では、幼児と児童の交流体験を基に授業研修を実施し、幼小の接続がより効果的なプログラムの開発が必要である。しかし教員の意識としては接続関係の維持が難しいことや、幼小の教育内容についての理解や認識が薄いことなど、自己の現場教育が優先している実態がうかがわれる。そこで今後は鹿児島市幼小連携研修会の入学準備カリキュラムやスタートプログラムを活用した、より効果的な授業への取り組みが求められる。これらのことを踏まえ、幼稚園から小学校への接続に効果的な科目として、音楽を取り入れたプログラムを考えてみたい。

3 鹿児島市内のA小学校とB幼稚園での取り組み

鹿児島市内のA小学校とB幼稚園は地理的環境が近く、B幼稚園の平成24年3月卒園児44名中27名(61.4%)がA小学校に入学した。そこで、A小学校3クラス1年生担任に対して幼小接続についての調査を平成24年10月に実施した。

1) 鹿児島市立A小学校での調査結果

C教諭 女性 31才 小学校教諭経験4年

D教諭 男性 42才 小学校教諭経験9年

E教諭 女性 44才 小学校教諭経験24年

○小1プロブレムを経験、または聞いたことがあるか。

(C、E教諭)

・特にない。

(D教諭)

・入学後2～3週間であれば、そのような状態もあり得るが、数ヶ月に渡ることは無かった。

○小1プロブレム解消のために幼稚園、小学校で出来ることはないか。

(C教諭)

・幼稚園の頃から少しずつ保護者から離れ、自立を促すような支援が必要。

・話を聞く態度や集団行動を身に付ける活動を多く取り入れることも大切。

(D教諭)

・偏食、遅食の改善。幼小で弁当等で苦手なものが入っていない食事のみであると偏食になる可能性がある。

・45分間で準備、食事、片付けをしなければならなくなるので、食事時間の設定が必要。

(E教諭)

・話を落ち着いて聞く経験を積み重ねていく。

・入学後は生活や学習面で初めて経験することが多く、話をしっかり聞き、理解するこ

とが必要。

本調査では、「数ヶ月にわたりクラスが落ち着かない状態」になることはないが、小学校入学時にはこのような状態は起こり得るとの意見がある。また、クラスが落ち着かないという具体的内容で、集団行動や食育、話の理解について意見があった。これらから小学校入学当初は少なからず接続の問題があり、幼稚園における準備プログラムが必要であることが分かる。また、B幼稚園で行われるお店屋さんごっこに、A小学生児童の参加や、A小学校の授業に、B幼稚園園児が参加するなどの交流は行われている。また卒業式や入学式にはお互いの所属長が参加しているが、両施設の所属長はさらに教員レベルの交流も必要との認識は持っている。このような認識を基に、幼稚園から小学校への接続問題を改善することを目的に音楽教科から観たプログラムの開発を考える。

2) B幼稚園における音楽プログラムの試み I

①音楽による小1ギャップ対策プログラムの考案

小学校では、幼稚園・保育所と異なり、時間割が決められ、長時間集中することが子どもたちに求められる。音楽を単独に見ても、幼稚園・保育所では生活に密着した場面で歌をうたうことが多く、また「表現」活動の中の一つであるため動きながら歌ったり身近にある物の音で遊んだりといった活動を行っており、小学校に入学してから音楽の授業で椅子に座ったまま歌うといったことにギャップを感じる可能性がある。そこで、幼稚園や保育所では音楽活動を行うことで集中力や聞く力を養い、小学校では、幼稚園・保育所で経験したことがある子どもたちが感じることでできる活動を発展させ、音楽能力を高めていくためのプログラムができないかと考えた結果、リトミック（注6）を中心とした活動を考えた。

幼児期にリトミックを導入することで、創造力や想像力、集中力や聴く力などを伸ばす手助けをすることができ、また音楽性、表現力も伸ばすことができるのではないだろうか。また、小学校にこの幼児期に経験したリトミックを発展させたものを導入することで、音楽能力を高め、より人格教育の手助けをし、幼児期に経験したものを小学校に入学してからも経験することで、学校生活への安心感を感じることができないだろうか。今回の研究では、B幼稚園に協力していただき、幼稚園における音楽活動の提案と実施を行った。プログラム案は以下のようなものである。

B幼稚園におけるプログラム案 I（実施者 中村礼香）

音楽的観点のねらい	一般教育的観点のねらい	活動内容
導入		子どもたちが知っている歌をうたう（森のくまさん、でぶいもちゃんちびいもちゃん、まつぼっくり、どんぐり、どんぐりころころなど）
音に合わせて動く	即時反応・集中力・聴く力を高める	四分音符で歩く、スキップする、走る、ゆっくり（二分音符で）歩く、の音楽を混ぜて弾く。子どもたちはその音を聴いて、動きを変える。また、途中で音楽が止まったら動きも止めるようにさせる。

音の長さの 違いがわかる		<p>「ロンドン橋」（訳詞：村山壽子 イギリス民謡）の音楽に合わせて歩く。伴奏を、四分音符、八分音符、二分音符で弾いた時の違いに気づき、歩き方を変えることができるかどうかを見る。</p> <p>先生方に橋を作ってもらい、低音でのクラスター音が聞こえたら橋を落として子どもを捕まえてもらう。子どもたちはその橋の下を各伴奏の弾き方に合わせた歩き方（小走り、ゆっくり、四分音符）で歩く。</p>
テンポの違い がわかる	想像力・表現力を 高める	<p>「ぶんぶんぶん」（作詞：村野四郎 ボヘミア民謡）と「ぞうさん」（作詞：まどみちお 作曲：團伊玖磨）を使って、早い動き、ゆっくりな動きを音楽に合わせて判断して動いてもらう。「ぞうさん」ではグリッサンドが聞こえたら水浴びする、高音でのトリルが聞こえたら高い木の上のりんごを取る、低音でのトリルが聞こえたら地面の草を食べるといった動作を指示しておき、アトランダムにそれらの音を入れる。</p>
リズムを真似するこ とができる(その1)	集中力・聴く力を 高める	<p>指導者が手や体全体を叩いてリズム打ちし、それを子どもたちが真似する。その後、指導者が叩いたリズムを足でステップする。</p>
リズムを真似するこ とができる(その2)		<p>指導者がピアノで弾いたリズムをステップする。</p>
リズムに乗ることが できる		<p>キーボードに内蔵されている8ビートのリズムに合わせて指導者が体を動かす。子どもたちはそれを真似する。床を叩いたり、お尻やおなか、頭、肩、ひざなど体のあちこちを叩いたり、手首や腕を揺らしたりといった全身運動を行う。少しずつテンポアップしていく。</p>

3) 音楽プログラム I の実施結果



写真1. リトミック指導実践の様子①



写真2. リトミック指導実践の様子②

①導入～音に合わせて動く

B幼稚園の年長組にて、上記のプログラムを実施した。子どもたちは「リトミック」を経験することは初めてであった。最初は子どもたちと一緒に歌をうたうことから導入をはかり、音楽活動に入っていった。

「みんなはスキップできるかな？」という問いかけにすぐ全員がスキップをしてみせてくれたので、それに合わせて指導者がスキップのリズムの曲を弾き、途中で何も言わずにピアノを弾くことを止めた。すると子どもたちも自然と動きが止まった。リトミックは音楽をよく聴くということが一番大切にしていることであり、ピアノが止まると動きも止めるというルールがあるのだが、それを一切説明していなかったにも関わらず、子どもたちの動きが止まった。子どもたちから「音がないと動けない」という言葉が聞こえてきたことから、はしゃぎながらも音楽を気にして動いていたことがうかがえた。そして、ここから先も言葉では何も言わず、二分音符の長さの曲や、八分音符の曲、四分音符の曲と変えていくと、子どもたちも自然と歩き方が変わっていた。これはしっかりと集中していないと気付くことができない。初めてリトミックを体験する子どもたちが、最初からこのようにはっきりと反応が見られるとは考えていなかった。

②音の長さの違いが分かる

「ロンドン橋」を使った活動では、落ちる橋に捕まりたくないという気持ちで走って橋の下を潜り抜ける子どもと、指導者が弾くピアノのテンポに合わせて歩かなければと感じている子どもがおり、子どもたちの列が乱雑になる場面が見られ、ただのゲームになってしまった。活動終了後に子どもたちに、どの活動が一番楽しかったかを聞いたところ、「ロンドン橋」という答えが多かったことから、子どもたちには楽しんでもらえたようであるが、音楽的、教育的な効果は今回は得られなかったように感じる。しかし、今後この活動を何度か行うことで、音楽に合わせて歩こうとよく音楽を聴くことができるようになれば、集中力を高める活動になるであろう。

③テンポの違いが分かる

「ぞうさん」と「ぶんぶんぶん」の2曲を一緒に取り上げた理由は、どちらも子どもにとって想像しやすい動物であり、様々な面で対称的だからである。例えば、蜂はとても小さく動きは素早いのに対して、象は体が大きく動きは遅い。「ぶんぶんぶん」は八分音符が多く使われており曲の動きが細かいのに対して、「ぞうさん」は付点四分音符が多く使われており、ゆったりとした曲である。そして「ぶんぶんぶん」は2拍子、「ぞうさん」は3拍子なので拍子の違いを把握させやすい。子どもたちが明らかに違いを感じ取れるように伴奏を工夫し、子どもたちも感じ取って動いてくれたように思う。今回は2拍子、3拍子の区別をする活動は行わなかったため、次回はその活動を取り入れたい。

④リズムを真似することができる (その1)～リズムに乗ることができる

指導者が手で叩くリズムを真似してもらった活動を行った。体のあちこちを叩きながら、付点やシンコペーション、十六分音符など少し難しいリズムも入れながら真似してもらったが、子どもたちはほとんど真似できていた。これは集中して指導者を見て、音を聴いていないとできないことである。本来はここで止めるつもりであったが、リズム打ちがかな

りうまくできていたため、指導者が手で叩いたリズムを足でステップする活動を行った。これもほぼ全員の子どもたちができていた。そして、さらにピアノで弾いたメロディーのリズムを足でステップさせることまで行ったが、これも子どもたちにとっては容易だったようだ。

全体的に指導者が想像していた以上に子どもたちは動くことができていた。今回は「音楽活動の時間」としてまとまった時間を頂き、指導させていただいたが、これを保育者が子どもが歌をうたっているときなど少しの時間に取り入れられるような短いプログラムを考案し、頻繁にこれらの活動を行ってもらうことで子どもたちの集中力や聴く力を高め、また表現力や想像力などを高めていけるのではないかと考えている。

4) B幼稚園における音楽プログラムの試みⅡ

プログラム案Ⅰの結果をもとにプログラムを再考し、同じくB幼稚園において再度音楽活動の実践を行った。

B幼稚園におけるプログラム案Ⅱ（実施者 中村礼香）

音楽的観点のねらい	一般教育的観点のねらい	活動内容
導入		子どもたちが知っている歌をうたう（あわてんぼうのサンタクロース）
音に合わせて動く	即時反応・集中力・聴く力を高める	四分音符で歩く、スキップする、走る、ゆっくり（二分音符で）歩く、の音楽を混ぜて弾く。子どもたちはその音を聞いて、動きを変える。また、途中で音楽が止まったら動きも止めるようにさせる。
合図に反応する	即時反応・集中力を高める	「さんぽ」の曲に合わせて四分音符で歩いている途中、「ハイ」という指導者の声が聞こえたら一拍だけジャンプをしてまた歩く。
音の違いを聞き分ける（音の音高、強弱）	想像力を高める	森を散歩しているという設定で、音による合図で森の中で見つけた木になり、風が吹いている音楽が聞こえたら木のまま揺れる。その強弱により、揺れる大きさを変える。また、ドングリを地面から拾う、木から取るという動作を低音部、高音部でピアノを弾くことで判断し、行動を変えさせる。森の中で出会った動物（ウサギ、蛇、象）の音楽に合わせて動き、どの動物の音楽を指導者が弾いているか判断して曲が変わったらその動物になりきる。
リズムを真似することができる	集中力・聴く力を高める	指導者が手や体全体を叩いてリズム打ちし、それを子どもたちが真似する。
リズムのカノンができる	集中力、短期記憶力を高める	指導者が体を叩いて作り出すリズムを、4拍遅れで真似をするカノンとよばれる活動を行った。

2拍子と3拍子の違いがわかる	聴く力、集中力、記憶力を高める	「ぶんぶんぶん」に合わせ、2人組でトン・パとテンポに合わせてリズム打ちをさせる。それに慣れたら、別の友達と3人組を作ってもらい、「ぞうさん」に合わせてトン・パ・パと手合わせをしてもらう。曲による友達の組合せの記憶が必要であり、「さんぽ」を弾いている間は自由に動き、「ぶんぶんぶん」「ぞうさん」になったらすぐにその相手の友達を探して組になりトン・パやトン・パ・パをする
リズムに乗ることができる		キーボードに内蔵されている8ビートのリズムに合わせて指導者が体を動かす。子どもたちはそれを真似する。床を叩いたり、お尻やおなか、頭、肩、ひざなど体のあちこちを叩いたり、手首や腕を揺らしたりといった全身運動を行う。少しずつテンポアップしていく。

5) 音楽プログラムⅡの実施結果

①導入～音に合わせて動く～合図に反応する

B幼稚園のプログラムⅠを実施した組とは別の年長組にて、上記のプログラムを実施した。このクラスの子どもたちも「リトミック」を経験することは初めてであった。プログラムⅠと同じく子どもたちの反応は良く、ルールを伝えていないにも関わらず、ピアノの音が止まったら動きが止まり、曲の雰囲気を変えると、それに合わせてステップしていた。そこで、即時反応力をより高めるため、四分音符で歩いている途中に、「ハイ」という合図を指導者が言うと一拍だけジャンプしてまた歩くという活動を取り入れた。これはかなり集中していないとジャンプが遅れてしまう。しかし、子どもたちは簡単にこの課題をこなしていた。ほとんどの幼児が同時にジャンプをすることができ、大学生に対して指導者が同じことを行った時よりも反応が早かった。

②音の違いを聞き分ける

プログラムⅠでは、ここで「ロンドン橋」を使って活動を行ったが、ただ橋が落ちることを楽しんで音楽を聴くというところまで子どもたちができていなかったため、別の活動を行い、音楽的な要素の理解をできるかどうか見てみることにした。

森の中を散歩するというお話を使い、音の音高を理解することができるかという活動を行った。地面に落ちているドングリを拾うときには低音でピアノを弾き、木になっている実を取る時は高音でピアノを弾く。最初は違いが判らなかつたようだが指導者の、「今はどっちからドングリを取る音楽が聞こえるかな」という声掛けをきっかけに、すぐ子どもたちは、「上」「下」とわかるようになった。また「ウサギ」「蛇」「象」のイメージできる曲を弾くと、蛇では地面を這い回ったり、ウサギでは跳ねたりということが、音楽を変えるとすぐにその動物になりきることができていた。

③リズムを真似することができる～リズムのカノンができる

プログラムⅠと同じく、指導者が手で叩くリズムを真似してもらう活動を行った。体のあちこちを叩きながら、付点やシンコペーション、十六分音符など少し難しいリズムも入

れながら真似してもらったが、子どもたちはほとんど真似できていた。これは集中して指導者を見て、音を聴いていないとできないことである。子どもたちからは「もっと速くして、難しくして」という声が聞こえてきたため、リズムのカノンを行った。「先生のリズムを追いかけてきてね」という言葉がけだけで、4拍遅れでリズムを真似するということを理解した子どもたちは、最初は戸惑っていたが、ほぼ全員が完全にカノンとして最後まで真似することができた。これを大学生に行っても、大学生は途中でわからなくなってあきらめることが多いが、子どもたちは最後まで真似しようと必死で集中していた。子どもたちの頭の柔らかさを実感した活動であった。

④2拍子と3拍子の違いがわかる

「ぞうさん」と「ぶんぶんぶん」の2曲を使った活動は、プログラム I でも行った。その際、今回は2拍子、3拍子の区別をする活動を行いたいと考えていたため、今回はそれをメインに行った。幼児に2拍子と3拍子の概念について教えるわけではない。「ぶんぶんぶん」では2人組でトン・パ、「ぞうさん」では3人組でトン・パ・パという2と3という数だけ意識してもらい、曲を聴いて仲間との組合せや手拍子の行い方を判断してもらう。5, 6歳児にとって難しいことではないかと危惧していたが、何の混乱もなくスムーズに子どもたちは動くことができていた。この活動を小学校で行うときには2拍子と3拍子の概念を教え、体で拍子の違いを理解できるようにすることができる。

⑤リズムに乗ることができる

子どもは早いテンポが好きである。今回の音楽活動においても、全体を通して「速くピアノ弾いて」という子どもが多かった。そこで、持参したキーボードで8ビートのリズムを鳴らし、それに合わせて体を動かすという活動を行った。最初は♩=120で行ったが、「もっと速く」と子どもたちが言い、また120では完全にリズムに合わせて動くことができていたので少しずつテンポを上げていくと、♩=300のテンポでも遅れることなくきちんとリズム運動をすることができていた。この指導を行ったクラスの子どもたちがみなリズム感が良かったのかもしれないが、音を聴き、指導者の動きを見て、全く指導者と同じ動きをすることができていた。

プログラム I・IIの実施を通し、幼児のリズム感の良さ、順応性をひしひしと感じ、定期的に活動を取り入れていけば、音楽能力を伸ばすことができるのではないかということがよくわかった。また、指導者が言葉はほとんど使わず、音楽だけで指示を出しても、子どもたちはそれを理解し、意図した通りに動いていた。これを習慣化させることができれば幼稚園の先生たちが言葉で指示を出さなくても音楽を聴いて子どもたちが自分の意志で動き、考えて行動できるような体制を作ることができるのではないだろうか。引き続き今後も様々な音楽活動をこの幼稚園で行い、子どもたちの反応の成長を調査していきたい。

考察

今回のA小学校における調査では、他自治体にみられるような小学校1年生の不適応状態は発現していないが、年度初頭では小規模ながらこれらの問題は発現している。また、

B幼稚園においては、幼小接続の問題軽減のために実践した本音楽プログラムが、どのような役割を果たせるかを探った。当初の目的である幼稚園での音楽プログラムの有効性については、幼児の音に対する反応が鋭敏で、幼児のモチベーションが約20分間持続できたことは、この音楽プログラムが幼児の表現領域における保育活動に有効であることを示した。今後においては、保育の汎用プログラムとして活用できるマニュアルを整備することや、保育実践においてこの音楽プログラムの具体的な有効性を示すことが必要である。また、幼稚園教諭に直接このプログラムの実践方法を指導する際には、普段からなじみのある幼児曲を使用することでプログラムの定着が可能になる。本論では幼小連携での有効な音楽プログラムを開発することを目指しているが、具体的なプログラムの実施は幼稚園での実施のみであった。今後は同様のプログラムをA小学校で実施する予定である。これは、B幼稚園の年長2クラスで実施した音楽プログラムの発展型をA小学校で実施することにより、その有効性をさらに探るものになると予想できる。

謝辞

本稿を投稿するにあたり、音楽プログラムの実施と資料の掲載を許可していただいた当該幼稚園と小学校の所属長に対して感謝する。なお、個人情報保護の観点からそれぞれの幼稚園名と小学校名は掲載しない。

注

1) 「宇都宮市現行学校教育の課題と新たな教育制度」宇都宮市教育委員会 2007年

宇都宮教育委員会は小1ギャップについて「しつけ等の家庭教育や幼稚園・保育所が行う教育・保育と小学校入学までに身に付けるべき力の不整合により、基本的な生活習慣の未定着など小1プロブレムの誘因となる境目」であるとし、その原因として基礎的な生活習慣の未定着があるとしている。また、今後の教育課題については、いじめや不登校など学校不適応への対応に加え、子どもの基礎学力の定着、豊かな心の育成、健康や体力の向上、社会性やコミュニケーション力の育成、英語の基礎の定着、勤労観・職業観の育成、さらには、多様な教育ニーズへの対応を図るための子ども一人一人のよさに応じた教育の展開が重要であるとしている。そしてこのようなギャップに対応するため、これまで宇都宮市においては、幼保小間における子どもの交流活動や小中学校間における互いの授業参観などにより、各学校の教育内容についての共通理解や交流の場の設置などを進めてきたが、異種学校間の連携接続が円滑になるまでには至っておらず、さらに人的配置、組織などの課題が指摘されている。このため、今後は、乳幼児期から青年期までの子どもの発達段階に応じた教育制度の見直しが求められているとし、今後の変化の激しい社会を心豊かにたくましく生き抜く基礎を培う「一貫教育制度」を検討している。

2) 「小1問題・中1ギャップの実態調査について」東京都教育委員会 2010年

東京都教育委員会は、小学校第1学年の不適応について次のように定義している。第1学年の学級において、入学後の落ち着かない状態がいつまでも解消されず、教師の話を受けない、指示通りに行動しない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩いたり教室から出て行ったりするなど、授業規律が成立しない状態へと拡大し、こうした状態が数ヶ月にわたって継続する状態をいう。また高知県教育委員会は小1プロブレムについて、「小学校に入学したばかりの小学生が、授業中に座ってられない、教師の話を受けない、集団行動がとれず適応できない状態。背景として、基本的な生活習慣が身に付いていないことやコミュニケーション能力の低下等が取り上げられているとしている。

- 3) 「指導資料」生徒指導第57号（通巻1645号）鹿児島県総合教育センター2009年
鹿児島県総合教育センターでは、本号において「中1ギャップの未然防止と対応の在り方」として、以下のようにまとめている。
 - ①本県における中1ギャップ（不登校及びいじめ）にかかる児童生徒の実態から
 - ②中1ギャップが起こる背景の理解とそれに基づいた対応
 - ③中学入学期における対応
- 4) 「幼・小連携研修会の経緯」鹿児島市教育委員会2012年
- 5) 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」2010年・「幼稚園と小学校の円滑な接続」（報告）2012年鹿児島市教育委員会
- 6) 1890年代にスイスの音楽家であり作曲家であるエミール・ジャック＝ダルクローズによって創案された音楽教育のメソッド。音楽能力を伸ばすだけでなく、集中力や想像力、創造力、即時反応力などを伸ばすというような人間教育としても有用であることが発見され、幼児期の教育のメソッドとしても広く世界的に取り入れられている。

参考・引用文献

- ・ チョクシー, L/エイブラムソン, R/ガレスピー, R/ウッズ, D「音楽教育メソッドの比較 コダーイ、ダルクローズ、オルフ、C・M」（板野和彦訳）全音楽譜出版社、1994
- ・ ジャック＝ダルクローズ, E「リトミック・芸術と教育」（板野平訳）全音楽譜出版社、1986
- ・ ジャック＝ダルクローズ, E「リズムと音楽と教育」（板野平訳）全音楽譜出版社、1975
- ・ 中村礼香「幼稚園におけるリトミック指導に関する研究」神戸大学大学院修士論文、2006
- ・ 徳永静江「幼小連携における実態と課題を探る」聖徳大学生涯学習研究所、2009

（平成25年1月16日 受理）

